
ZIGZAGセブンティーン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NIGZAGセブンティーン

【Zコード】

Z3725P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

幼馴染みと付き合っているけれど十七歳の今は喧嘩ばかり。そんな二人はどうなるのか。シブがき隊の歌からヒントを得た作品です。

ー

「だからあの時はね」

「違うだろ、いたんだろ」

俺は嫉妬丸出しにして彼女に言つた。

「相手がな」

「相手って何のことよ」

「だから男だろ」

俺達は学校の中で言い合つ。廊下でまともに言い合つてるから行き交う他の連中が見ている。けれどそれに構わず言い合つていた。

「俺以外のな。いるんだろ」

「あのね、何でそつなるのよ」

「違うつていうのかよ」

「あんた馬鹿！？」

彼女の呆れた声が来た。

「つていうか何よそれ、何でそつなるのよ」

「昨日電話してた時おかしかつただろ」

俺は昨日の話を出した。

「あれ聞いたら誰だつてな」

「あんた私の家來たことあるわよね」

彼女は俺の言葉にむつとして返してきた。

「そうよね。それも何度も」

「うどん屋だよな」

「そうよ。そこに誰がいたのよ」

「親父さんとお袋さんと」

俺は頭の中でこいつの家族を思い出しながら言つた。

「爺さんと婆さんと御前の兄さんが一人に弟さんが三人だったよな

「男何人いるのよ」

「七人だよ」

随分と大家族だ。書く言う俺も兄貴がいて姉貴がいて下に弟と妹だ。何と兄弟姉妹全部揃っている。嬉しいのかそうでないのか。

「多いな」

「それだけいれば当たり前でしょ」

俺に口を尖らせて言つてきた。

「誰かの声が入つてもね」

「そうなるのかよ」

「しかもあんたが昨日電話してきました時間つて」

その話にもなつた。

「六時位だつたわよね」

「確かにそうだつたな」

俺は言われてその時間を思い出した。確かにそんな時間だつた。外が真っ暗になつていなのは覚えている。結構あやふやだが。

「そんな時間だつたよ」

「お客様一杯いたじやない」

このことも言われた。

「おじさんとか学生さんもいるし」

「それでかよ」

「そうよ。あんたのお家だつてそうだつたでしょ」

俺の家は八百屋だ。その時間ちょっととさぼつて電話をしたつて訳だ。その後で親父とお袋にちょっと小言を言われたのは気にしていない。

実は俺達は同じ商店街で暮らしている。それこそ幼稚園に入る前から一緒だ。高校も同じで十七になつた今じやこうなつてるつて訳だ。

「忙しいでしょ、夕方は」

「お客様が多くてな」

その時間は仕事帰りの人人が主なお客さんだ。

「ちゅうとな」

「そうよ。全く」

「ここまで言つて溜息だつた。

「あんたつて変に嫉妬深いんだから」

「悪いかよ」

「ええ、悪いわよ」

即答だつた。

「お陰でいつもいつもね」

「いつもいつも。何だつてんだよ」

「喧嘩じゃない」

うんざつとした顔でその言葉を言われた。

「しようがないわね」

「ふん、御前がおかしなことしなかつたらな

「しないわよ」

「絶対にかよ」

「そうよ、絶対によ」

「だつたらいいんだけれどな

何かこんな感じで言い合つてだつた。不機嫌な学校の時間になつた。その後の授業の後で屋上で何人かのツレと話をしていた。その話の内容は。

第一章

「なあ、御前や」「さつき彼女と喧嘩してたよな」
適当にだべつて隠れて持つて来た漫画雑誌なんかを開きながらそのつえで話をしていた。その中で俺に言つてきただつけわけだ。
「さうだよな」「さうだよな」
「廊下で」「廊下で」
「ああ」「ああ」
俺はその言葉にさきつとした口調で応えた。
「そうだよ」「まだよな」
「最近毎日みたいに喧嘩してるよな」
「御前等大丈夫か？」
「そんなに毎日喧嘩して」
「ほつといてくれよ」「ほつといてくれよ」
俺はこいつ言い返した。
「そんなの御前等に関係ないだろ」「まあな。それはな」
「俺達には直接関係ないさ」「ただな」
「喧嘩を続けてたらな」
どうかというのだった。それでだった。今度はだ。
俺からだ。こうツレ達に話した。
「いいだろ？別にな」「いいつていうのかよ」「じゃあ今もかよ」「喧嘩してもか」「喧嘩してもか」
「それでもいにしへのうのかよ」

「そうだよ。そんなの俺の勝手だわ」「これが俺の言葉だつた。

「別にな」

「まあそうだけれどな

「御前の話で俺達には関係ないさ」

それは周りも認めることだった。眞づまでもないことだった。

「けれどな。何かしようちゅう喧嘩してみるだろ」

「そういうの見てたらな」

「心配になるんだよ」

「心配か」

俺は学校の売店で売っている牛乳を飲む手を止めてその言葉に反応した。三角の紙「ツップ」でストローで飲むやつだ。俺はこれが好きだ。

「俺達がかよ」

「そうだよ。別れるなよ」

「折角付き合つてゐるんだからな」

「それはな

「わかつてゐるわ」

そのつもりはないだからはつきりと答えた。

「そんなことはな

「まあな。本当にうまくやれよ

「仲良くしにくくともな

「別れるな

またこの言葉を告げられた。

「喧嘩別れなんて最悪だぞ」

「だからそれはなるなよ」

こう周りからも言われる俺達だつた。とにかく何か顔を見合わせればその時の程の差こそあれ言い争いになる。それはデートの時でもだつた。

映画館で話題の映画を観た帰りだ。向こうから言つてきた。

「あのね、さつきね

「何だよ

道を歩きながらだ。俺に言つてきた。

「擦れ違つた人だけれど

「擦れ違つた？」

「そうよ、奇麗な人

こんなことを言つてきた。

「見てたでしょ」

「誰だよ、それ」

「あの大学生みたいな。髪の長い」

そんな話を続けてくる。

「ミニスカートの。その人よ」

「そんな人いたか？」

「さつき擦れ違つたじゃない」

「そうか？」

「そうよ。見てたでしょ」

ここでは目を顰めさせて俺に言つてくれる。本当に面白くなぞう

に。

「その人」

「あんな。いちいちそんなの覚えてるか

俺は怒った顔になつてこう言い返した。

「そんなことな」「白を切るの？」
「何でそうなるんだよ」「だって」
「今度は口を尖らせてだ。俺に言ひてきた。
「あんたつていつもそつだから」「いつもかよ」「いつもじゃない」
「いつもの売り言葉に買い言葉だつた。
「すぐ他の女人見るんだから」「あんな」
「俺は少しうきびつとした顔になつていた。それを自覚しながらだ
つた。
「目に入つたら見たつてことになるのかよ」「そうよ」
「無茶言ひな。じゃあ何だつて言えるだらうがよ」「要はそくならないよつに氣をつける」とよ
「目に入るのなんて意識できるかよ」「できるわよ。視線逸らしなさいよ」「一瞬でも入つたら駄目なんだろうが」
その論理ならどうなるか。俺は考えながらまた言い返した。
「それつて無茶苦茶にも程があるだろ」「だから氣をつけなさいって言つてるの」「氣をつけられるか、そんなこと」「そうよ」
ここでも言ひ合つ俺達だつた。何から何まで喧嘩ばかりだつた。
そして俺達のその喧嘩はだ。向こうの親父さんとお袋さんにも伝わ

つた。

それでだつた。俺達はそのまま壁に呼ばれた。土曜の閉店後にだ。もう誰もいなくなつた店の中で向かい合つて座つてだ。親父さん達に言われた。店の中はまだ灯りが点いたままなのに寂しい感じがした。お客さんがいなくなつた後の店の寂しさがそこにあった。

「聞いてるぞ、色々とな

「あんた達のことをね」

俺達は四人用の席に座つていた。向いには親父さんとお袋さん
がいつ。俺と彼女は親父さん達と向かい合つて形で横に並んでこる。
そこで言われた。

「喧嘩ばかりしてんそうだな」

「それも毎日」

「悪いの？」

彼女がまず言つた。

「それが」

「そう言つか

「相変わらず気が強いわね」

「ええ、悪い？」

「悪びれずに言ひ。本当に鼻つ柱が強い。

「だつてね。」こいつが悪いのよ

「おい、俺かよ」

俺も口を尖らせてい反論した。

「俺が悪いのかよ」

「あんたがすぐ他の女の子見るからでしょ」

「そういう御前だつてな」

俺はすぐに言い返した。

「何かつていうと他の男をな

「私が何したつてのよ」

「笑顔向けてな。あれは何だよ」

「笑顔つて何よ」

「他の奴に気があるんだろ」

「いつもひつひつだった。」

「違うのかよ」

「あのね。学校とかお店にいたら他の人と会って話をしたりするでしょ」

「いつもひつひつで言つ。いつも通り。」

「それの何処がおかしいのよ」

「おかしいだろ。それつてよ」

「あんただつてそうじゃない」

何か話していくて堂々巡りになつてきている気がした。けれどそれでも俺達はムキになつてだ。それで言い合つ。お互にだ。

「他の娘見て」

「御前この前な」

昨日のことを思い出してだつた。

「俺が小学生の女の子見ても言つたよな」

「それが悪いっていうの?」

「そりやないだろ。相手小学生でも三年位だつたぞ」

「七年後にはいい歳になつてるじゃない」

「七年つてどれだけあると思つてるんだ」

俺にとつちや七年はとんでもなく長い時間だ。それこそ小学校生活より長い。そんな長い年月を一體どうしろかと思つた。

「御前どんだけ嫉妬深いんだよ」

「嫉妬じゃないわよ」

「じゃあ何だつていうんだよ」

「こんな調子で俺達はことんまで言い合つた。もつ親父さんとお袋さんることは忘れていた。それで一時間位言ひ合つとだつた。」

お互に疲れてしまってだ。肩で息をするようになった。それで、

「だつた。

「まあそつこいつだな

「わうね

親父さんとお袋さんが優しい声で俺達に叫びてきた。

「御前等そのままこけ

「仲良くしなやこ

「仲良くつて

「何処がなのよ

俺達は親父さん達に同時に顔を向けて反論した。

「俺達つて何があつたら本当

「言い合つてるけれど

「喧嘩する程つてやつだ

「そつこいつだよ

しかし一人のことばはこんな調子だった。

「そつやつてお互に見ているからな

「わうなるのよ

「そつか?

「そうなの?

「これまた二人同時に声をあげた。

「俺達つてそつなのか

「喧嘩ばかりしてゐるのに

「まあそれがわかるのはな

「大人になつてからだけれどね

今じやないといふのだった。十七歳の今じやないといふのだった。

「まあ今は盛大に喧嘩しろ

「お互にがよくわかるし

「盛大にかよ」

「していいの」

「俺達だってそうだったしな」

親父さんが満面の笑顔で言つてきた。

「それはな」

「そうよ。結婚する前はね」

「だつたよな」

親父さんは今度はお袋さんの言葉にその笑顔で返した。俺が知つてゐる限りこの二人はいつも仲がいい。息もぴったり合つてゐる。けれどそれがだ。昔は違うといふ。俺はそれがぴんとこなかつた。しかしだつた。一人はさらには話をするのだった。

「それでお互いわかつたからな」

「そうした喧嘩はするものよ」

「そうしたか」

「喧嘩していいの」

「そうだ、今はぶつかれ」

「どんどんね」

親父さんとお袋さんはまた俺達に言つ。

「それで幸せになれよ」

「いいわね」

「何かよくわからぬいけれど」

「応援してくれるの」

「ああ、そうだ」

「その通りよ」

また笑顔で返す二人だった。

「それじゃあな」

「今は仲良く喧嘩しなさい」

俺達に言つことほそのことだった。とりあえず俺達の仲は十七の時はそんなのだった。

その十七だ。高校生活三年目、卒業が近付いてきていた。

俺はだ。ある時彼女にそのことを尋ねられた。学校の帰りに一人で喫茶店に入つてだ。そこで声をかけられたのだ。

「ねえ。卒業したらね

「何だよ、卒業したらつて

「あんたどうするのよ」

こう俺に尋ねてきた。バナナジュースを飲みながら。俺は俺でホットコーヒーを飲んでいる。格好つけてそれを飲んでいた。

その俺にだ。尋ねてきたのだった。その尋ねてきたことは。

「大学行くの？」

「そんな訳ないだろ」

俺はそれはすぐに否定した。

「俺の頭で大学とかないだろ」

「そうよね。じゃあ就職よね」

「ああ、そうだ」

その通りだと答える俺だつた。

「スーパーに就職するんだよ」

「スーパーになのね」

「そうだよ。もう決まつたんだよ」

それが決まるのは早かつた。本当にあつさりだつた。どうも家が八百屋をやつてることがそのことによく利いたみたいだ。

「地元の店に入る」となるな

「そう。頑張ってね」

「そつちはどうなんだよ」

俺は俺で問い合わせた。

「就職か？それとも進学か？」

「私は喫茶店にね」

「そこに入るのかよ」

「そう、喫茶店っていつも和菓子系のね
つまり甘味処ってわけだ。そこだというのだ。
そこで修業するから。お金も稼ぎながら

「将来の為かよ」

「家、うどん屋だからね」

そうした意味じゃ俺と同じだった。やっぱり同じ商店街で育つた
だけはあった。

「家は一番上の兄ちゃんが継ぐけれど
「御前も暖簾分けか？」

「そんなつもりはないけれどね」

「そうか」

「そうよ。そうね、お互に就職するのね」

「そうだな。高校を卒業したらな」

「じゃあ」

「その話をしてからだ。俺にこんなことを言つてきた。

「部屋、借りる？」

「部屋！？」

「そう、アパート」

「アパートにはいる？それじゃあ

「アパートにはいる？それじゃあ
ぶしつけにこんな話をはじめてきた。

「何でそんな話になるんだよ」

「だつて。私達付き合つてるから」

「だからだつてのかよ」

「そうよ。だからね」

「一緒にか

「嫌?」

少し真剣な顔で尋ねてきた。

「それつて」

「嫌じやないわ。けれど急に言われたからな」

「それでなの」

「そうだよ。すぐ」に答えるには心の準備が必要だろ」

「そう」の」はすぐ」に言つるものよ」

いつも通り無茶なことを言つやがる。心の奥底から思つた。

「だからね

「すぐにかよ」

「そうよ。それでどうなの?」

また俺に尋ねてきた。

「一緒に住む? どうする?」

「嫌つて選択肢はないだろ」

俺は」」つ言つてやつた。

「そうだろ」

「そうよ。じやあこいわね」

「ああ。高校を卒業したらな」

「一緒にね」

俺ににこりと笑つて話してきた。

「それじやあね。一人一緒にね」

「暮らすか」

そんな話をしてだつた。俺達は十八になつて高校を卒業した。それからすぐに一緒に暮らして結婚して今も一緒にいる。子供も何人かできた。俺達はもう十七じやない。けれどその十七の時のこ

とは今もはつもつと覚えている。今にして思えば楽しい時だった。

NHGNAGセブンティーン 完

2010・12・7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3725p/>

ZIGZAGセブンティーン

2010年12月8日00時10分発行